

ディスカッション成果 平成30年度 ラオス派遣

1. ディスカッションの概要

日 時	9月18日9時～17時45分、9月19日9時～17時20分
場 所	ラオス国立大学（ビエンチャン）
プログラム名	日本・ラオス ユースリーダーズフォーラム
テーマ	Education / Environment in Japan and Lao P.D.R.
参加者	日本青年12名、ラオス青年20名
スケジュール	9月18日 9:00-9:40 開会式 10:00-11:25 アイスブレイク 11:30-13:05 昼食 13:20-14:30 環境科学部見学 14:50-16:10 教育学部見学 16:30-17:45 文化交流プログラム 9月19日 9:00-10:30 基調講演（教育） 10:50-12:00 基調講演（環境） 12:00-13:50 昼食 13:50-14:30 日本青年によるプレゼンテーション（教育） 14:30-15:20 日本青年によるプレゼンテーション（環境） 15:40-16:20 ディスカッション 16:20-17:00 グループサマリープレゼンテーション 17:00-17:20 閉会式



2.分科会の概要

テーマ	教育
トピック	教育課題とそれに対する青年による提案
参加者	日本青年6名、ラオス青年10名
成果	
1.ラオスの現状 ・山間部等、教育施設から離れた場所に住む少数民族の子供たちは通学が難しい。 ・理系分野の教科書の分配が不足している。 ・教育予算が不足している。 ・教員が不足している。 ・少数民族が扱う言語を扱う教員が不足している（教員の質にも関連）。	
2.日本の現状 ・初等教育において教員の過剰労働（担任としての役割の重さ） ・中等教育において教員の過剰労働（授業と部活動指導員など課外の仕事） ・生徒同士のいじめ問題 ・子供の貧困（生徒間での経済格差） ・少子化に伴った学校の合併と遠距離通学	
3.上記現状をふまえた上での意見交換の内容 ・平等に教育を受けるため、奨学金の選考基準を成績からさらに拡大していく必要がある。 ・奨学金選抜の基準として面接試験を採用する。 ・少数民族の子供たちのための金銭的支援を提案する。 ・ラオス語を公用語として普及させるために、山間部での学校数を増やす。 ・首都圏への通学のために公共交通機関を発展させることが必要である。 ・山間部での教育を普及させるために、少数民族が扱う言語を教える教員を奨励する。 ・ラオスの初等・中等教育予算の増加を図るプログラムを打ち出すべきである。 ・中等教育等、義務教育卒業後に質の高い教育を受けるための金銭的支援を促す。 ・教育の質の改善に伴う教材費の高価格化を防ぐ、または緩和を図る。 ・教育の収入を増やすために伝統文化を尊重したビジネスを取り入れる。	
4.発表の内容（ラオス・日本に向けた学生視点での提案） ・政府に奨学金の支援を要請する。 ・中等教育のための奨学金制度を拡充する。 ・教員にボランティア制度を採用し、少数民族の子供たちへの教育を拡大する。 ・ラオス語の普及を目指す。 ・教員の仕事を細分化し、専門教員を育成して仕事を分担する。 ・地域特有の伝統工芸品や食物の生産を教育の一環として採用し、市場で販売する。	

教育グループ感想

私たちラオス派遣団は国立ラオス大学の学生と共に、9月18日、19日の二日間を通してディスカッションプログラムを行なった。私は、教育コースを選択し、ラオス国立大学の教育学部の見学や、ラオスの教育に関する基調講演を拝聴した。さらに日本の教育についてプレゼンテーションを行い、ラオス、日本の教育状況の共有に努めた。その後、日本青年とラオス青年と合同でグループを作り、両国の教育を分析しながら、具体的な提案を議論した。

私はラオス青年とのディスカッションを通して以下の三点を学ぶことができた。第一に、ディスカッションに臨む積極性である。ディスカッションとは、グループ員全員が参加し、意見を交換することで、初めて成果を得ることができる。今まで自分は人前で何かを発言すること、また自分から場を仕切ることには抵抗感を感じていたが、今回のプログラムでは、自分が人の意見を聞き出す役割を経験することができた。いかに、グループ員が話しやすいような空気を作れるか、また常に終着点を考えながら、交わされている議論の現状確認する事に楽しさと、自分の討論力の進歩を感じた。

第二に、タイムマネジメントの重要性が挙げられる。

全ての議論では制限時間が設けられており、その時間内に意見交換、提案作成を終わらせなければならぬ。時間に気を配りながら行うことで、議論の内容に適宜注意しながら、論点にズレがないか、提案を考えるための時間は確保できているかなど、細かなところに気配りができるようになった。タイムマネジメントを行うからこそ、議論に深みを出せたと思う。

第三に英語力の重要性である。日本・ラオス両国とも、非英語圏に所属しており、英語力には学生間において少しばらつきがあったように思う。ラオス青年たちは、ラオス語で話し合った後、一人が英語に訳して日本青年に伝えることが多かった。また私も英語で相手に明確に伝わるように、かつ論理的に話すことの難しさを実感した。しかし、自主研修やプレゼンで調べたリサーチ内容をもとに具体例を英語で話すことで相手の理解が感じられた。英語は海外青年との意見交流の基礎であることを改めて実感した。

今後、バックグラウンドの違う青年たちと有意義な意見交換、また成果を出すために、今回のディスカッションで得た学びをいかしていきたい。



テーマ	環境
トピック	環境問題・環境汚染
参加者	日本青年6名、ラオス青年10名
成果	
1.ラオスの現状 ・発展途上国であるため、先進国の日本と比べると環境というテーマで改善の余地が多々ある。一方で手つかずの広大な自然があるため、その利用方法は多くある。 ・環境に対する法整備が完全に整ってない。そのため、外国人農家が使う農薬が劇物で環境汚染や環境破壊が起きている。またそれが周りの住人の体調にも影響している。 ・上下水道は通ってはいるが、水質が悪い。上水道から飲める地域はあまりない。ほとんどの国民がペットボトルやクリクラのようなウォーターサーバーを利用している。そのため、日常生活の多くの場面でペットボトルを使う。いたるところにペットボトルのごみが捨てられている。 ・ペットボトルや缶ごみはリサイクルすることにお金が必要でそのまま捨てられている。 ・地下を通っている水道管はいつどのような原料で作られたのか記録が残っていない。そのため、水道管がどれくらい劣化しているのか推測がたてられない。 ・下水道は下水処理することなく河川に流される。内陸国のラオスにとって川が汚れてしまうことは生活環境の悪化にもつながる。 ・川の水が汚染されているため、家庭で使われる水が病気の原因となっていた。近年は改善されつつあるが、郊外や山の村ではまだ危険性はある。 ・ごみを処理するシステムがない。ゴミが集められたとしてもゴミ処理場がほとんどないため、ごみがそのまま捨てられている。それによって、病原菌や病虫害、腐臭、土地の汚染など様々な問題に直面している。 ・日本のようにごみを分別する必要がない。しかし、ごみを処理するシステムが出来たら導入しなくてはならない。 ・ラオスは水力発電が主流だ。ラオス国内で消費しきれなかった電力を隣国に売ることもできる。しかし、ダムを造ることで動植物の生息地が狭まったり、失われたりと環境破壊につながる。また、ダムが造られたことによって川の生態系が壊されてしまう。そのほか、下流の地域に影響が出る。例えば、水量の減少によって耕作に支障が出る。	
2.日本の現状 ・環境に負担をかける火力発電や、東日本大震災の時に多大な被害をもたらした原子力発電所へ依存している。 ・再生可能エネルギーはコストが高いため、完全な移行が難しい。 ・各インフラ設備の中で建築後50年経つものがある。それらは老朽化によって崩壊する場合もある。以前起きたトンネルの事故は老朽化が原因だった。 ・老朽化が懸念されている建築物は一刻も早く調査をする必要がある。 ・電気自動車は発売されているが、未だにガソリンを使う車の方が主流。 ・環境汚染や環境破壊は過去の日本で顕著に見られた。	
3.上記現状をふまえた上での意見交換の内容 ・ラオスは国が法整備にもっと力を入れるべきである。 ・両国とも、環境を配慮した発電方法をもっと取り入れるべきである。 ・ラオスはごみ処理のシステムを作るべきだ。何もせずに放置しておけば、悪臭や病気の原因になる。さらに、将来ごみを置く場所すらなくなってしまい、自然があるところに投げ捨ててしまえば、環境破壊につながる。日本のごみのシステムを導入して、ごみを分別して処理したらどうだろうか。 ・メコン川などラオスを流れる川を綺麗にした方がいい。メコン川が汚染されたままでは、浄水施設に負担がかかるし、農作物に影響が出るかもしれないからだ。他国との連携が必要になるが、内陸国であるラオスには他国とのつながりが必要であるため、ラオスから積極的につながりを作っていくべきだ。 ・地震や震災の危険性がある日本は原子力発電をやめるべきでないだろうか。災害は想定外の出来事であるから、いくら想定したとしても本当にその通りの震災が起こるか事前に分かるはずがない。	

4.発表の内容

- ・ラオスの環境問題が多く話題に出たことから、ラオスの環境問題とその打開策について発表した。
- ・ラオス政府は環境に対する法整備に対してもっと力を入れるべきである。なぜなら、外国人がとても強い農薬や化学物質を使ってしまったら、ラオスの環境破壊につながるからだ。実際に過去に事実があるため早急に対応すべきだ。
- ・ゴミの放置が問題となっている。そのため、日本のごみ処理システムを導入して、ごみの分別やごみの回収、ごみの処理をするべきだ。
- ・隣国と協力してメコン川の汚染を少しずつ綺麗にしていくべきだ。例えば、メコン川に浮いているゴミを取り除く、下水をそのままメコン川に流さない、メコン川にたまるゴミを撤去する、などが挙げられた。

環境グループ感想

私たちはよく考えてみるとラオスの環境はおろか、日本の環境問題について日本青年の代表としてディスカッションができるほどの情報を持っていなかった。だからラオスの環境を調べると同時に日本の環境についても調べた。事前研修期間で、自分たちがどのように進めていくのかを決め、自主研修期間では各自がラオスや日本の環境や環境問題、その原因を調べた。そしてただ調べるだけでなく、英語でまとめ、週に一度電話ディスカッションを行った。この電話ディスカッションをすることで、各自が調べてきたことがさらに整理され、英語を話しやすくなった。そのディスカッションはラオス現地でも行った。電話でのディスカッションより活発に行え、またファシリテーターをやる際に顔を見ることが出来るので話を振りやすかったり、話の展開がしやすかったりした。

ラオス青年とのディスカッションでは、自分たちが調べてきた情報と現実での差があることを痛感した。それを踏まえて、現地の青年が感じる環境問題に対して、自分の持っている知識でどのようにしてアプローチする

かを考えた。ラオス青年の中には英語があまり得意ではない青年もいたり、自分の知識不足で専門用語が分からなく、なかなか進捗が進まなかったりする場合もあり、ファシリテーターとしてとても歯がゆい思いだった。その時は同じ国の青年同士で助けたり、英英辞典を使ってお互いの意見を理解しようとしたりした。

自主研修期間の電話ディスカッションから、私のなかで大きくなる想いがあった。それは日本が過去起こした公害問題を知ってもらい、ラオスで起こらないようにしてほしいという想いだ。確かに経済発展の過程で環境汚染や環境破壊が起こってしまいやすい。豊かな自然があふれるラオスだからこそ、自然を大事にする心を忘れないでほしい。日本人青年はラオスの持続的な環境保全についても考えていた。

このディスカッションを通して、この事業の重要性を再度理解させられた。青年がこのように交流することによって、互いの国の現状について知り、自分たちに何が出来、これからどうしていきたいのかを話す。普段の生活では経験できないとても貴重な機会だった。